

日本政府が資本家に媚びて所謂「物価調節」を逆に行った結果は、日本をして世界第一無比絶倫の高物価国たらしめた。日本が私に与えた最初の最大驚異の一は、実にこれであった。東京市の乱雑不規律を見ると、この大都市が悪い西洋料理を喰い過ぎて、胃瘰癧と腸加答兒かたごとを一時に併発したように思われる。日本に着いてまだ一週間も経たぬ内に、私はこの大病の日本にうんざりしてきた。あの「海外発展」も「国威振興」も、能く診察して見れば、実は資本主義という文明食を喰い過ぎて胃瘰癧を突発して、手を張り足を踏んばったに過ぎない。醜業婦の出稼も腸加答兒の結果に過ぎない。この大病の日本、果して万死に一生をかち得るや否や。

十四 大正末期の社会情勢

私は大正九年十一月、久しぶりに放浪の旅から帰って来た。大正二年三月一日に横浜を出てからまさに八年間の旅行であった。この久しい旅行から帰って、私は日本の社会のはげしい変化を目撃して、ことに思想界の激変を見て一驚を喫した。それはかつて私の記憶にあった日本とは全然別の世界に帰来したような感じを受けたからである。

以下少しく当時の社会情勢を語ってみよう。

社会主義同盟の創立 大正九年一月発行の『経済学研究』（東京帝大経済学会機関雑誌）は、帝大助教授

森戸辰男の論文「クロボトキンの社会思想の研究」のため、発売禁止の処分を受け、森戸は同時に起訴された。この事件は日本の思想界、評論界に激甚なるショックを与えた。そして森戸はやがて獄に下ったが、これがためにかえってクロボトキンの研究が熱病の如く流行した。それからこれに続いて

マルクスの流行となり、更に進んでサンジカリズムやギルド社会主義までも紹介されて、社会思想の弘通は俄かに一般社会にまで及ぶに至った。

これより先、大正八年頃より京都帝大教授河上肇は『社会問題研究』という定期的のパンフレットを連続的に発行して、社会知識の普及に力を添えた。河上の著『貧乏物語』なども、社会問題について世の注意を喚起するに与って力があつた。吉野作造がデモクラシーを提唱して、国粹主義者と論戦したのもこの当時であつた。

そもそも欧州大戦争とロシア革命とは、日本の思想界に非常な影響を与え、いやしくも学者、思想家または文学者をもつて任ずる者は、社会主義と労働問題を知らざるべからず、社会問題と労働問題とを解せざる者は、文化人にあらずと言ふことになつた。これを十年前の記憶に照し合せて、私は一驚を喫せざるを得なかつた。深い感慨を禁じ得なかつた。

このような有様で、かつて社会主義を非難した大学教授が、にわかにはマルクス主義を唱導したり、かつて社会党を恐怖した労働運動者が、何時の間にか革命的な社会主義を叫ぶことになつた。それは労働運動、社会運動が、すこぶる盛大になつたためである。このような有様であつたので、学生の間にも多くの思想団体が起つた。帝大の新人会、早稲田の暁民会、建設者同盟、明大のオーロラ協会の如きはその著名なものであつた。この機運に乗じて、社会主義者、労働運動者、思想家、文士、学生等を打って一丸とする「日本社会主義同盟」が創立せられた。その発会式を神田青年会館に挙げたのは大正九年十二月十日であつた。

しかしこの好況は水くは続かなかつた。欧州大戦後の経済界の好景気に際して労働運動はすこぶる隆盛に赴き、ストライキは何時も成功してきたが、その経済界には漸く反動的な不景気が襲来するようになり、労働運動もまた困難になつてきた。さらに社会主義同盟が組織せられて間もなく、彼等の間にも漸く思想の乖離を見出してきた。また労働者の間には、指導者排斥、知識階級放逐の風潮が高まり、知識階級もまた官憲の迫害を怖れて漸く運動より遠ざかるようになった。かくて一時非常に隆盛を極めた社会主義の流行熱も、何時の間にか冷却してゆくように見えた。

ロシア共産党よりの援助　しかるにこの時に当り、日本の共産主義者とロシア共産党との間に連絡が成立し、ロシアよりは日本の同志に運動資金を供給するとの評判がしきりに世に伝えられた。日本の社会主義者、労働運動者にしてロシアに密行する者が相次ぐようになった。共産主義者と行動を共にしてきた無政府主義者大杉栄は、この時分から分離して、自ら雑誌『労働運動』を発行するに至つた。大杉栄の記するところによれば、彼は自ら上海に渡航して、ロシア共産党より幾千金かの運動費を受けてきた。しかし大杉はその時より共産党と手を切つたと言う。先に社会主義同盟の機関誌たりし『社会主義』はすでに消滅し、共産主義者は月刊『前衛』を発行した。『前衛』はついで『赤旗』と改題し、豊富なる財政を以て大いに宣伝につとめた。また、この当時、無政府主義的思想雑誌『自由人』というのがあつた。加藤一夫らの自由人聯盟の機関誌であつた。全国労働組合総聯合が中央集権主義と自由聯合主義とに分裂したのはこの頃であつた。

大正十一年九月三十日、大阪天王寺公会堂において、全国労働組合総聯合の創立大会が開かれたが、中央集権的合同派の日本労働総同盟と、分権的自由聯合派の組合同盟とは、同大会において忽ち決裂し、総聯合はついに不成立に終わった。

これに先だって、欧文植字工の組合「欧友会」は、大正三年欧州大戦勃発のために、横浜における外字諸新聞が廃刊し、在留外人の帰国、商店の閉鎖などのため、欧文印刷事業は極めて閑散を告げ、大正四年の第九回総会についてその機関紙『欧友』を廃刊し、会務もまた杜絶するに至った。ところが大正五年八月、工場法の施行せらるるや、工場主中には、これを逆用して、多年勤続の病職工を餓首する者があり、それに憤激した印刷工有志は、ここに新たに「信友会」を組織するに至った。幹事長に杉崎国太郎、副幹事長に水沼辰夫が選ばれた。大正七年には機関誌『信友』が発行された。大正八年十二月には新聞印刷工組合「正進会」が創立され、機関誌『正進』が発行された。この印刷工の「信友会」と「正進会」とはサンジカリズムの精神を体して、自由聯合主義の急先鋒となり、大阪大会に際しても猛運動の中堅となっていた。知識階級排斥の主張なども、この一派において最も激烈であった。その後「信友」「正進」両会は合同して印刷工組合となり、さらに全国印刷工聯合会を組織するに至った。和田栄太郎、延島英一、渡辺幸平、山鹿泰治、水沼辰夫らはいずれも熱烈なる闘士として自由聯合主義のために努力した人たちである。

日本共産党の検挙 大正十二年六月、日本共産党の検挙が行われた。事件の内容はたんに警察法制

度、秘密結社という軽微な犯罪であるが、時節柄世間を驚かせた。またこの事件で起訴された者の中に堺利彦、荒畑寒村の外に早稲田大学教授であった佐野学、猪俣津南雄の二人がいたので、殊にセンセーションを大きくした。

大震災後の形勢 おなじ年の九月一日、関東大震災が起り、そのために東京、横浜の二大都市は大部分烏有に帰し、その大震災に際して、朝鮮人と社会主義者とが結託して、革命騒乱を計画するといふ、蜚語流説が紛々として伝えられた。こうして朝鮮人の虐殺事件が行われ、東京府下亀戸においては社会主義者平沢計七らの虐殺が行われ、ついで甘粕憲兵大尉の大杉栄夫妻と一少年との殺害事件が起った。いやしくも東京にあって社会主義者または無政府主義者として活動していたものは、殆んどすべて捕縛されて、非常な虐待を受けた。

かくてこの大震災は日本の社会運動史に一画線を描いて、ここに新時代の開幕を報ずるに至った。

日本フェビアン協会 大震災直後に起った運動は日本フェビアン協会である。大正十三年一月初頭、安部磯雄、山崎今朝弥及び私の間に計画の議とどのい、ともかくも一旦壊滅に帰した日本の社会運動に復活の息を吹き込まんとの意気を以て、殆んどすべての傾向、学派、主張者らをお網羅し糾合することに努めた。その結果ここに参集したものの中には、新居格、秋田雨雀、小泉鉄、菊池寛、藤森成

吉、小川未明、島中雄三、法政大学教授小林輝次、中大教授川原次吉郎というように、社会主義の右翼左翼、共産主義者、無政府主義者あり、大学教授あり、文士あり、極めて賑やかな集団であった。そして五月には機関雑誌『社会主義研究』が創刊され、東京を初め地方各地に講演会を開催して氣勢を揚げた。しかるにその年の十二月、ジョルジャ無政府主義の元老チェルケゾフの『共産党宣言の種本』訳を機関誌『社会主義研究』に掲載する可否について、会員中議論が分れ、既に新聞に広告し、組版まで成立したのを、紹介者の私より撤回する事件が起った。この事件があつてから、協会外のアナキストは漸く協会に対して反感を懐き、それはやがて協会内にも影響して来た。しかし大正十四年三月には、久しい宿題であつた普通選挙法が議会を通過したので、諸方に無産政党組織の叫びもあり、一般社会運動に氣勢を添えるに至り、従つてフェビアン協会も活動を続けて来た。そして同年一ぱいはその存在を続けたが、しかし元来寄合世帯の同協会には分解作用が行わるべき運命を孕んでいた。果せるかな、同年十二月十五日、同協会は解散して、各会員はそれぞれの主義に従つてそのカテゴリイに帰つて行つた。

政治研究会 フェビアン協会と殆んど同時に、政治研究会というのが創立された。同会には島中雄三、高橋亀吉、鈴木茂三郎、佐野袈裟美、大山郁夫などという人々がいた。これはイギリス労働党流の無産党を造る準備団体らしく見えたが、後、共産主義者が漸く勢力を占めてきて、右傾派の排斥が行われ、ついで解散するに至つた。

無産政党の組織 普通選挙法が成立して無産政党組織が流行し、それがまた在来の労働組合に影響して来た。この機に乗じて共産主義者の潜航的運動が各方面に侵入し、諸組合、諸団体内に波瀾を起してきた。その著しいのは、労働総同盟の分裂、水平社の分裂、政治研究会の決裂など、これである。労働総同盟から分離した共産派は、日本労働組合評議会を組織し、総同盟の現実主義を排して、階級闘争を高調するようになった。

これより先、大正十一年四月神戸において、杉山元治郎、賀川豊彦らによって創立されたる日本農民組合は漸く発達して、日本における社会運動の一大勢力となつて来た。

大正十四年十二月一日、東京神田青年会館において、農民労働党の結党式が行われた。極右派の日本労働総同盟、海運連盟などと、極左派の印刷工聯合その他を除いた殆んどすべての労働組合が、これに参加した。ところがこの無産政党は、創立大会が終ると同時に警視庁の禁止命令に接した。けだし当局は、これをもつていわゆる共産党系の仕事なりと認めたのである。

しかし、無産政党組織の事業はこれ中で絶するに至らなかつた。大正十五年三月五日には、労働農民党の結党式が挙げられた。今度は前回の失敗に鑑みて態度を穏健にし、安部磯雄、賀川豊彦なぞをも中央委員に加え、労働総同盟をも加えた。しかし同年同月、共産主義者らに対する門戸開放の党議に反対した総同盟、総連合、自治会、製陶労働などの諸団体、並びに安部磯雄、賀川豊彦らについては同党を脱退するに至つた。

無政府主義者の運動 一方、大正十二年には、無政府主義団体のギロチン社一派の大阪における銀行

員殺害事件あり、翌年九月一日の震災記念日には、大杉栄の同志和田久太郎が、震災当時の戒厳司令官陸軍大将福田雅太郎を本郷において狙撃せる事件あり、ついで厳酷なるアナキスト検挙がおこなわれた。そしてこれらの一味中、古田大次郎は東京において（大正十四年十月十五日）、中浜鉄は大阪において（大正十五年四月一日）共に死刑の執行を受け、村木源次郎は市ヶ谷刑務所に死し、和田は無期懲役に処せられ、その他二十名の同志は大阪において無期或いは十数年の懲役に処せられた。古田大次郎が獄中にもした遺書『死の懺悔』はすこぶる読書界を動かして、広く読まれた。

大正十五年一月に、無政府主義青年は、全国二十余の労働組合及び思想団体の青年を糾合して、黒色青年聯盟を組織し、月刊『黒色青年』を機関として活動を開始した。銀座諸店頭破壊事件の如きはけだしこの一味の活動であつたらう。

同年五月、サンジカリズムをもつて成立せる全国の労働団体は、総聯合を計画して「全国労働組合自由聯合会」を組織し、機関紙『自由聯合』によって、その一糸乱れざる運動振りを天下に示した。全国にわたって四十種の組合または組合聯合がこれに加盟した。

大杉栄らによって創立された労働運動社は、岩佐作太郎、近藤憲二ら熱誠ある闘士をもつてその運動を継続した。キリスト教牧師であつた八太舟三も、また無政府主義運動に投じ、猛運動の中心となるに至つた。

十五 再度の渡欧

前述した如き激動せる日本を後にして、私は大正十年に再びヨーロッパへ出かけた。それはブリュッセルの新大学内にあつたエリゼ・ルクリュの地理学研究所の図書全部を日本に送るためであつた。

最初ヨーロッパから帰つて間もなく、私は地質学者石本恵吉氏の招待に接して、小石川高田町の同氏邸を訪問した。宏荘な同邸の結構に驚かされて、立派な応接間に入ると若い夫人の鄭重な応待に接して再び驚きの目を見張つた。談たまたまエリゼ・ルクリュの地理学研究所の話に及び、またルクリュ自身の社会運動の歴史に及ぶと、石本氏のルクリュに対する興味は非常に深まっていた。石本氏は帝大の地質学科の出身であつたと思うが、とくに地理学者にして、革命運動に身を投じたエリゼの生活に興味を持たれたのであろうと思う。それに石本氏は当時洋書の輸入販売に着手して居られたので、ことに興味を引いたのかも知れない。最初の訪問の時であつたか、或いは二、三回目の訪問の時であつたか、今は忘れたが、石本氏はルクリュ所蔵図書の日本輸入を熱望するようになった。私は、